

第17回ミツバチ科学 研究会に参加して

春井 勝

年に1回の同窓会のような気持ちで今年も参加させていただいた。午前の部の研究発表者は、佐藤敬久さん(農学科4年)、佐藤寛恵さん(大学院生)の姉弟ということで、玉川大学農学部で家庭的な雰囲気を感じられた。弟さんは「マルハナバチ類の食物加工戦略」についての発表であった。花蜜(蔗糖)が酵素によってブドウ糖と果糖に分解され、さらにブドウ糖が、グルコン酸と過酸化水素に分解されることにより、殺菌作用を持つようになることが蜂蜜の場合にもあてはまる、ということが非常に参考になった(私の学生時代と比べたら、非常に高水準の研究だ)。姉さんはミツバチの働きバチをマーキングして、サーモメータを利用し、日齢の若い働きバチほど巣内の暖かいところを好むことを実証された。

午後の特別講演(2題)の1つは吉田先生の博士論文の研究となった「ニホンミツバチとセイヨウミツバチの交尾時刻と交尾場所の相違」についての概要説明だった。日本での両者の交尾場所(雄蜂の集合場所)の発見から始まって、異種交雑の可能性を人工受精技術を駆使して調べられ、また、女王蜂の交尾飛行の場所・時間

帯の違いを確認され、その結果として、両者の交雑の可能性は低く、日本では、両者は共存するという結論を出された。これらの研究の課程をVTRを使用して説明されていたので非常にわかりやすかった。それとともに、研究のなかで色々なアイデアを出された実験をされており研究の大変さも窺われた。

もう1つは静岡農試の池田二三高さんの「果菜類の交配におけるマルハナバチの利用」であった。私自身、農業改良普及員という仕事柄、トマト生産農家にマルハナバチの管理指導をしているが、公的機関では、セイヨウマルハナバチ(*Bombus terrestris*)の管理について研究されているところはほとんどない。今の日本での利用体系では、いかにコロニーの寿命を延ばすかということがトマト生産のコストダウンにもつながる。管理技術を向上させるためにはハチを扱える研究者がもっと必要だと思う。今後、栽培面と、マルハナバチの管理面との両方の研究が進められるべきであろう。

また、研究会の後の懇親会でも色々な「蜂屋さん」と知り合いになれて大変有意義なひとときを過ごすことができた。

ミツバチ科学研究会の30数時間後の1月17日の早朝、私の住んでいる阪神地域を未曾有の大地震が襲った。5500名以上の犠牲者を出した大震災に直接被災した人々、幸運にも免れた人々、それぞれに、心に深い傷を負いながらも懸命に復興に励んでいる。ミツバチの世界を人間社会にあてはめるのは良くないが、今の状態は、まるで彼女達が自分たちの壊れた巣を大急ぎで修復している時のようである。今こそミツバチの世界の勤勉さ、統率性を参考にする時だと思う。

春になれば花が咲き、ミツバチが訪れ、蜜を集めてくれる。人々が、そんな「花とミツバチとの関係」をゆっくりと観察できるような心のゆとりをはやく取り戻せるように手助けするのが、我々、ミツバチに関わっている者の役割だと思っている。

(〒665 宝塚市安倉西1-8-28

兵庫県宝塚農業改良普及センター)

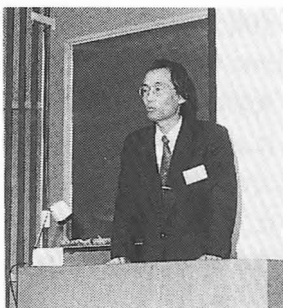


図1 池田二三高氏の講演